朝の収穫

朝の収穫

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=17700956

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, 原作終了後

戦後のヒュンマの村暮らし。
いつの間にか、数年経っています。
なんか、人口も増えています…💧
ヒュンケル３０代前半、マァム２０代後半のイメージ。

先日、カヅキ様user/1688436にエアスケブをお願い致しました。
リクエストは「既婚者ヒュンケル」。
そうしたところ、うちの村暮らしヒュンケルのイメージで描いていただきました!!!!
嬉しいので、お話をつけさせていただきました。
カヅキ様、いつもありがとうございます💕

表紙の写真は、photoＡＣhttps://www.photo-ac.com/様でお借りしました。

Table of Contents

- 朝の収穫

朝の収穫

　私は、朝食の支度を終えると、家の裏手にある勝手口の扉を開けた。

　私たちが暮らす自宅の裏手には、庭がある。短い下草が生えている範囲では、子どもたちが遊び、庭の隅には、何本か、果実を実らせる樹も植えていた。
　ちょうどオレンジの樹が、黄金色の実をたわわに実らせて、収穫時期となっていた。
　私と一緒に起きてきたヒュンケルが、オレンジの実を取っておこうと言って、少し前に、庭に出ていった。
　私が朝ご飯を作っていると、思ったよりも早く、子どもたちまで起きてきた。
　かまどの火に触られると危ない。
　朝ごはんができるまで、庭で遊んでくるようにと私が言うと、子どもたちは、元気よく返事をして、勝手口から外に出て行った。
　その扉から顔を出し、ヒュンケルに、子どもたちを見ておいてね、と言うことは忘れなかった。

　子どもたちが外に出ていくと、私は、急いで朝ごはんの支度を続けた。
　そうして、一通りの準備が終わると、私は、エプロンを外した。勝手口の扉を開け、庭に出ていく。

　私が庭に出ると、子どもたちがころころとじゃれあいながら、下草の上を転がって遊んでいた。
　何もなくても、お互いがいて、広い場所があればそれで遊べるみたいだった。
　子犬のようで可愛らしいな。
　私は、嬉しそうに子どもたちを見つめていたけれども、ふと、庭の隅に目をやった。

すると、両手で木桶を抱えたヒュンケルが、私と同じように子どもたちを見つめていた。
　彼の抱える木桶の中には、オレンジがたくさん入れられていた。
　どうやら、今朝の分の収穫は終わったみたいだった。
　ヒュンケルは、木桶を抱えたままの姿勢で、子どもたちにその眼差しを向けていた。
　その表情がとても柔らかくて、口元にも、小さな笑みが上っていた。目元を嬉しそうに緩め、男性にしては大きくてはっきりした目が、穏やかに下がっている。
　こうしていると、この人が、かつて剣をふるっていたなんて思えなかった。
　私と一緒に、この村で暮らすようになって数年。
　いまでも、彼は、ふとした時には、かつての戦士の眼差しを見せることもあるけれども、こうして子どもたちに向ける視線はとても穏やかだった。

　子どもたちは、そのうち、起き上がると、今度は追いかけっこを始めた。
　朝から埃だらけになるわね、と思って、私は苦笑した。
　そうしていると、ヒュンケルと目が合った。
　彼もほんの少し苦笑した。たぶん、同じことを考えているのだろう。
　私は、子どもたちに呼びかけた。
「ごはんできたわよー！もうおしまーい。」
　子どもたちは、私に気付くと、足を止めた。
「おかーさーん。」
「ごはんー？」
「そう。戻ってらっしゃい。」
「まだあそびたい~。」
「食べ終わってからね。」
　不満を口にしながらも、子どもたちは私に駆け寄ってきた。
　すると、今度は、子どもたちは、ヒュンケルに視線を止めた。
　いや、ヒュンケルというよりも、彼の抱えている木桶が気になっ

たみたいだ。
「あーおとうさーん！」
「とれたのー？」
「ああ。終わったよ。
　お前たちも手伝ってくれたしな。
　ほら、おいで。」
　どうやら、樹の下の方の実を取るのを、子どもたちも一緒にやっていたらしい。
　そのうち、ヒュンケルが肩車をしても子どもたちが届かないところの実しかなくなったのだろう。お手伝いできなくなった子どもたちは、庭で遊びまわっていたのだろうな、と私は思った。
　子どもたちは、ヒュンケルに駆け寄った。
「ほら。」
　すると、彼は、子どもたちに、ひとりに１個ずつ、オレンジの実を渡した。
「ご褒美だ。
　母さんにむいてもらえ。」
　彼がそう言うと、子どもたちは歓声を上げた。
「やったー！」
「いいにおーい。」
　私は、子どもたちを促した。
「はいはい。ごはんの後にむいてあげるわよ。
　さあ、おうち入りましょう。
　ごはんよ。
　桶にお水入れておいたから、おてて、よーく洗ってね。」
「はーい。」
　子どもたちは、オレンジを両手で持ったまま、勝手口から家の中に入っていった。

　私は、ヒュンケルに近づくと、木桶の中を覗き込んだ。
「たくさんとれたのね。
　ありがとう。
　子どもたちも喜んでいるわ。」

「ああ。
　熟してないものは樹に残しておいた。」
「ありがとう。」
　村で生活するようになって何年も経った今、こういった作業もヒュンケルは難なくこなす。
　ヒュンケルは、私に尋ねた。
「これはどうする？
　外に置いておくのでいいか？」
「あ、うん。
　母さんにも分けるし、教会でできたベリーとも交換してもらうの。
　終わったら、残りを貯蔵庫に入れておくわ。」
「わかった。」
　私がそう言うと、ヒュンケルは、軒下にオレンジの入った木桶を置いた。
「ヒュンケルも、中に入って。
　ごはんにしましょう。」
「ああ。」
　私が家の中に入ろうとすると、ヒュンケルに声を掛けられた。
「マァム。」
「なに？」
　私は振り返った。
　すると、思ったよりも近くに彼が立っていた。
　ヒュンケルが、私の頬に手を触れた。
　動く暇もなかった。
　あっという間に、唇が重ねられる。
　一瞬の口づけだった。
　ヒュンケルは、すぐに唇を離すと、挑戦的な笑みを浮かべた。
「子どもたちが見ていないからな。」
　この人は・・・一緒に暮らすようになって何年も経つのに、ふとこういう時に、男としての顔を見せる。
　私は、恥ずかしくなって頬を赤らめてしまった。
　ヒュンケルがときどきこういったことをするのは、知っているの

に。そんなに珍しいことでもないのに。
　どうしよう、嬉しい。
　立ち止まったままの私に、ヒュンケルが尋ねる。
「どうしたんだ、マァム。
　中、入らないのか？」
　何事もなかったかのように、彼は、そう言う。
　この人のせいで固まってしまったのに、と思うと、私は少しだけ悔しくなった。
「ヒュンケル。」
「なんだ？」
　私に合わせて、少し目線を下げたヒュンケルの首に、私は腕を回した。
　さっと、その頬にキスをする。
　私もまた、挑戦的な笑みを浮かべてみた。
「お返し。」
　すると、一瞬驚いた顔をしたヒュンケルが、私を見て、意味ありげに微笑んだ。
「かわいいことをしてくれるな。
　まったく・・・お前は、いくつになってもかわいい。
　こんなことをされたら・・・。」
　そう言って、私の耳元に唇を寄せた。
「もっと、かわいがりたくなる。」
　いきなりまとわせた夜の雰囲気に、私は戸惑った。
「ヒュンケルっ！！」
「冗談だ。
　朝ごはんだろう？入るぞ。」
　そう言って、彼は涼しい顔をしていた。
　私は、ふうと息を吐き、でもなぜか楽しくなって、彼と一緒に家の中に戻った。

　今日もまた、家族の１日が始まる。

イラスト　カヅキ様（https://www.pixiv.net/users/1688436）